



二人のカノジョ

清純美少女×クール美少女

早瀬真人

挿絵／孤裡精

立ち読み版



第一章	清纯美少女の快樂手コキ	4
第二章	美人転校生の生フェラ奉仕	48
第三章	元カノとの熱い初体験	92
第四章	悦虐の射精管理	134
第五章	童顔少女の濡れそぼつ恥芯	172
第六章	ハーレムは過激なユニフォームで	214

登場人物

Characters

皆川 倅太

(みながわ こうた)

王名学園二年の性欲旺盛な童貞少年。陸上部キャプテン。真奈と付き合っているが、中学時代に当時の彼女・玲香から急に別れを告げられたことが心の傷になっている。

浦木 真奈

(うらき まな)

倅太と同じクラス、同じ陸上部のガールフレンド。ベビーフェイスでセミショートの甘えん坊。性格は素直で、育ちのいい清楚なお嬢様。性に対しては奥手。

瀬戸 玲香

(せと れいか)

大人っぽい、ロングヘアの美少女。倅太とは中学時代に二ヶ月だけ交際していた。ややサディスティックで小悪魔的な一面も持つ。

第二章 美人転校生の生フェラ奉仕

1

翌日、侍太は憔悴しきつた表情で登校した。

昨夜は玲香のことばかりが頭に浮かび、とうとう朝方まで寝つけなかった。

これほど学校に行きたくないと思つたのは初めてのことだ。

元カノと今カノが同じ教室内にいる、しかも一年間共に過ごさなければならぬと考えただけで、深い溜め息が洩れるばかりだった。

(とにかく玲香とは一度、話はしておかなければならないよな。ちゃんと彼女がいることを伝えて、中学時代の関係は口止めしておかないと)

緊張の面持ちで教室に足を踏み入れると、昨日と同じように、クラスメートたちが玲香を取り囲んでいた。

この状況では、声をかけることすらままならない。

舌打ちをした侍太は、その一方でホツとしながら自分の席に歩んでいった。

(これじゃ、休憩時間や昼休みも話しかけられないかもしれないぞ。放課後まで待ったほうがいいかも)

倅太と玲香の席は窓側と廊下側に離れているため、気軽に会話を交わすこと自体、不可能に近かった。

「おはよう」

「あ、お、おはよう」

となりの席の真奈が、にっこりと笑いかけてくる。

彼女が自分と玲香の過去を知ったら、どんな思いをするのだろうか。

こぼれるような明るい笑顔も、今日ばかりはまともに見られなかった。

「今日は、陸上部の初練習だね」

「え？」

「やだ……ひよつとして忘れてたの？」

「完全に……忘れてた」

「ユニフォームは？」

「持ってきてないけど、替えのユニフォームは部屋に置いてあるから練習には出られるよ」

「もう、倅太君はキャプテンなのに」

「そう言うけど、別に好きこのんでキャプテンになったわけじゃないし」

陸上部の所属部員はたったの六名、しかも男子は倅太以外に一人もない。

三年の女子は二人いるのだが、王名学園の三年生は夏休み前から受験態勢に入る生徒が多く、二年生がキャプテンを務めるケースが通例になっていた。

ミーティングの結果、倅太は仕方なく主将の役を引き受ける羽目になったのである。「一年生が部活の練習を見学しにくるから、練習初日は楽しいクラブ活動をアピールしようって、みんな話合っただけなのに」

今日の真奈は、やけに厳しくとがめてくる。

ふくれっ面をしたとたん、倅太はある重大な事実を思いだした。

「あっ!？」

「どうしたの?」

「ぶ、物理の春休みの課題……すっかり忘れてた」

「え? だって昨日、ノートを渡したじゃない」

「鞆の中に……入れっぱなし」

ふだんは大らかな真奈も、もはや呆れた顔つきをしている。

「どうするの？ 物理は一時間目なのに」

「どうしよう」

物理の課題はやたら難しい問題ばかりだったが、ノートさえあれば、一時間もかからずに解答を埋めることができる。

（昨夜やるつもりだったのに、玲香のことばかり考えていたから）

二年進級初日から、まるで春の嵐に見舞われたようだった。

物理の授業で、倅太はノートもとらずに居眠りばかりをしており、ただでさえ担当教師に睨まれている。

授業開始のチャイムが鳴り響くと、倅太は再び深い溜め息をこぼした。

2

その日の放課後、倅太は図書館で物理の課題に取り組んでいた。

案の定、担当教師の逆鱗に触れ、今日中に課題を仕上げるよう、厳しく言い渡されたのである。

おかげで陸上部の初日練習も不参加となり、またもや真奈のお小言を聞く羽目にな

った。

王名学園は進学校のため、体育会系より文化系のクラブに所属する生徒が多く、部員数が少なければ、部の存続にも関わってくる。

一年生の見学者は、何人ぐらい来ているのだろうか。

プリントにペンを走らせるなか、陸上部のことが気になった倅太は手を止め、窓の外に視線を向けた。

隣接する体育館からは、他のクラブに参加している生徒たちの声が聞こえてくる。

新学期二日目ということで、図書館に倅太以外の姿はなく、まるで自分一人だけが取り残されたかのような心境だった。

(それにしても玲香の奴、完全に疫病神になってるよな)

今の倅太にとっては、物理の宿題より重要な問題である。

一刻も早く彼女との話を済まさなければ、安心した学園生活は送れそうもない。

(自宅の電話番号が変わってないのなら、携帯で呼びだしたほうがいいかもしれない。そのほうが落ち着いて話もできるだろうし。ようし、家に帰ったらさっそく！)

何はともあれ、目の前の課題を仕上げるのが先決だ。

再びプリントにペンを走らせたたん、カラカラと、入り口の扉が開く音が聞こえ

てきた。

図書委員か、それとも他の生徒が調べ物でもしに来たのだろうか。

倅太の座っている場所は図書室の一番端に位置しており、書架があるために入り口付近はまったく見えない。

（まあ、誰でもいいや）

真奈から借りたノートに視線を落とした瞬間、やけに涼しげな声が耳朶を打った。

「久しぶりね」

「あっ……これ、玲香」

まさか、彼女のほうから声をかけてくるとは。

一方的に別れを告げてきたというのに、いったいどういう神経をしているのだろう。目を丸くしている倅太を尻目に、玲香はとなりの席に平然と腰かけてくる。

予想外の出来事に面食らい、聞きたいこと、話さなければならぬことが、頭から一気に吹き飛んだ。

「な、何の用だよ」

しかつめらしい顔で視線を逸らし、物理の課題に取りかかる。

「あら、何の用とはご挨拶ね」

玲香が顔を寄せてくると、ローズの甘い香りが鼻先に漂った。

香水をつけているのか、いかにも大人っぽい彼女にぴったりのフレグランスだ。

「二年半ぶりのよ」

「そう？ たったの二年半じゃん」

意識せずとも、憎まれ口をたたいてしまう。

倅太にとつてのこの二年半は、真奈と交際するまで重い枷となり、長く心を縛りつけてきた歲月でしかないのだ。

男のプライドが邪魔をしているのか、それとも今さら心を乱されたくないという思いが強いのか、倅太はただブスツとした顔つきをするばかりだった。

「私のこと、ずっと考えてくれてた？」

「そ、そんなことあるわけないだろ」

玲香の上から目線に頭を熱くさせた倅太は、キッと睨みつけたものの、すぐさま我を取り戻した。

（いけない。ここで感情を露わにしたら、まだ気があると言ってるようなもんだ。冷静になって、話すことは話しておかないと）

倅太は軽く息を吸いこみ、落ち着いた口調で問いかけた。

「何で王名に編入したんだよ。学校は他にもたくさんあるだろ？」

「倅太がいるからに決まってるでしょ」

玲香の返答に、倅太は口をぽかんと開け放つばかりだった。

自分がどんなかたちでフツたのか、覚えていないのだろうか。

顔色を少しも変えず、まるでいらなくなったおもちゃをポイ捨てるように、別れを告げてきた人間の言う言葉とは思えない。

「俺が王名に入学したことは知ってたんだ？」

「うん、中学時代の友だちとときどき連絡を取り合ってた、その子から聞いた」

「誰？」

「倅太の知らない子。私、あまり友だちいなかったでしょ？」

その性格じゃ当たり前だろと思いつつも、倅太の心はざわついていた。

たとえ嘘だとしても、自分を追って編入してきたと言われれば、決して悪い気はしない。それでも倅太は、少しの笑みも見せずに大人の対応を試みた。

「そう。まあ王名はいい学校だし、同じクラスになったんだから、これからもよろしく頼むよ。あくまで友だちとしてね」

最後のセリフで釘を刺した直後、気持ちが一瞬と晴れていく。

未練などまったくくないし、自分にはもう真奈という可愛い彼女がいるのだ。もはや玲香の入りこむ隙など微塵もない。

このあと、「彼女」の存在を聞かれたらはっきりと答えよう。

俺には、浦木真奈という素敵なガールフレンドがいるんだと。

二年間のトラウマ人生も、これですべて払拭されるのではないか。

そう考えた侍太だったが、玲香が次に放った言葉に激しく動揺した。

「ずいふんと他人行儀なのね。私は侍太のこと、一日も忘れなかったのに」

「よ、よく言うよ！」

「向こうでは三人の男の子とつき合っただけど、どの子もパツとしなくて」

玲香ほどの美貌を持ち合わせていれば、男子からは引く手あまただろう。

彫りの深い、甘いマスクの外国人男性の顔が脳裏に浮かぶ。

当然のことながら、彼らとエッチも体験済みには違いない。

胸がチクリと痛み、心の片隅に嫉妬の炎が渦巻いた。

（俺が失恋の痛手を引きずって苦しんでいたときに、外人の男が玲香とエッチしていたのか。ちくしょうっ！）

真奈というガールフレンドがいても、自分はまだ童貞なのである。

もう玲香とは、ひと言も口を聞きたくない。

プイッと横を向いた倅太は、ぶつきらぼうに言い放った。

「話はそれだけ？ 悪いけど、課題を仕上げなきゃいけないから」

「あと一問だけじゃないの」

玲香がプリントを覗きこんだ瞬間、肩と肩が触れ、かぐわしい息が頬にまわりつく。

ドキリとしながら横目でうかがうと、長い睫毛と赤く色づいた唇が視界に入った。

近くで見れば見るほど、整った顔立ちは莊嚴と言えるほどの美しさを誇っている。

かわいい女の子とはこれからも出会うチャンスはあるだろうが、これほどの美人にお目にかかれる機会は二度とないかもしれない。

モデル体型とは言え、制服姿も、愛くるしい真奈に引けを取らない魅力がある。

（胸は、やっぱり中学のときより成長してるよな。ふ、太腿も思ったよりムチツとしてるぞ）

童貞喪失は、やはり玲香相手に捧げたかった。

淫らな妄想が頭にちらついた直後、彼女は倅太を一気に現実へと引き戻した。

「あの子とはしたの？」

「へ？」

「真奈ちゃんって言ったっけ？ あの子、倅太の彼女なんですよ？」

「ど、どうして……」

「そんなの見てたら、すぐにわかるわよ。すごくかわいい子ね」

真奈のことははつきりと告げるつもりだったのに、なぜかその言葉が出てこない。

それにしても、わずか一日で彼女との関係を見抜くとは。

玲香は外見ばかりか、やはり中身も大人の女性だった。

「お、お前には関係のないことだろ」

うろたえながら答えると、玲香はそれ以上追及せず、口元に意味深な笑みを浮かべた。

「ねえ、その課題を提出したら私の家に来ない？ 話したいことがたくさんあるし、他に……したいこともね」

「なっ……!!」

玲香は片手で頬杖をつきながら、悩ましげな視線を向けてくる。

脇の下が一瞬にして汗ばみ、倅太は顔をトマトのように真っ赤にさせた。

成長のない元彼をからかっているのだろうか、それとも……。

何にしても、このまま顔をつき合わせていたら、玲香のペースに引きずりこまれそうだ。

「行くわけないだろ……!!」

声を荒らげた瞬間、またもや図書室の扉が開く音が聞こえてきた。

倅太は慌ててプリントに目を落とし、玲香とは他人のフリを装ったものの、今度は心臓が凍りつくような事態が起こった。

「倅太君、いるの?」

鈴を転がすような、聞き慣れた声が頭の芯に響いてくる。

（ま、真奈だっ! 嘘だろ!!）

頭の中が真っ白になり、全身から血の気が失せていった。

人を疑うことを知らない少女でも、この状況を見れば、玲香と何かしらの関係があると気づくだろう。

まさに絶体絶命の危機にもかかわらず、元カノはいたって冷静だった。

「あらあら、大変。どうする? 私、隠れようか?」

耳元で囁く玲香の言葉が頭に入らない。

ただ呆然としているなか、美少女はやけにゆったりとした動作で椅子から腰を浮か

し、倅太の真下のスペースに身体をすべりこませてきた。

同時に書架の陰から、ユニフォーム姿の真奈がひよつこりと顔を出す。

「なあんだ、こんな端っこにいたんだ」

「う……うん。ここだと落ち着くし、窓から外が見えるから」

言葉が上ずり、心臓が口から飛びでてきそうだった。

四人がけの机の下には、十型の仕切り板が取りつけられている。

真奈の立つ位置から玲香の姿は見えないだろうが、倅太のいる側に回りこまれたら一卷の終わりだ。

(机の下に潜りこんでるんじゃ、もう言い訳なんかいつさいできない。玲香の奴、何でよけいなことをしたんだっ！)

わざと窮地に陥れようとしているのだろうか。

倅太が額に脂汗を滲ませると、幸いにも真奈は机の向こう側から歩み寄り、身を屈めてプリントを覗きこんできた。

「課題はできたの？」

「ほ、ほとんど終わりだよ。真奈が貸してくれたノート……!!」

答えている最中、倅太は下半身に走る違和感に身を震わせた。

なんと玲香が、学生ズボンのチャックを下ろしはじめたのである。

3

(な、な、な、何を……!?)

肩を派手にわななかせたとき、真奈はちょうどプリントに目を向けていた。

机の下を覗みつけると、玲香は口元に微笑をたたえている。

これほどの小悪魔的な笑みがあるだろうか。

「えっ、私の貸したノートが何？」

真奈に声をかけられ、否応なしにガールフレンドに相對するより仕方がない。

「あ、うん。ノートのおかげで、さくさくと進んだんだ。ありがとう、助かったよ」

ランニングシャツの胸元を、ふんわりと盛りあがらせるバストの膨らみ。

ショーツパンツの裾は鼠蹊部すれすれで、もっちりとした太腿と生足をこれでもかとさらけ出している。

いつもなら目のやり場に困るユニフォーム姿も、この日ばかりは視界に入らない。話を切りあげ、一分一秒でも早くこの危機から脱したかった。

「よかった。倅太君が先生に怒られていたとき、もう泣きそうになっちゃった」
「ご、ごめんね」

「新入生の見学ね、結局三人しか来なかったの。みんな、がっかりしていたわ」
真奈の話にもうわの空、倅太は心の中で（ひっ！）という悲鳴をあげていた。

玲香のしなやかな指が、チャックの隙間から差し入れられ、さらにトランクス合わせ目にまで潜りこんできたのである。

（う、う、う、嘘だろ？ いったい何をするつもりなんだ？ ま、まさか……）

倅太は平静を装いながらも、下半身はぶるぶると震えていた。

ややひんやりとした指先が肉茎にじかに触れ、不本意ながらも、快感の塊が風船のように膨らんでいく。

（やめろ、やめろ……ああああああつ!!）

無情にもペニスは玲香の手によって外に引っ張りだされ、しかも即座に両手でしごかれたため、海綿体には瞬時にして大量の血液が流れこんでいった。

全身の毛穴が開き、汗がどっと噴きでてくる。

玲香の手コキのテクニクは、呆気にとられるほどの練達さを極めていた。

右手で肉棹をローリングするようにしごきながら、左手の指先で亀頭の周囲をくる

くると撫でまわし、さらには雁首をツツとなぞりあげ、手首を返しながらペニスを根元から絞りあげる。

（く、くううっ、な、なんて技を……あ、ちよっ、尿道口を指で広げるな！）
裏茎には早くも強靱な芯が入り、肉筒は灼熱の棍棒と化していた。

玲香の手淫は、明らかに真奈のそれとは次元が違う。

こんな状態のまま平常心を保つなど、どだい無理な話だった。

（玲香の指の動き……すごすぎる。まるでピアニストの指みたいに繊細に動いて……。細長いのに思ったより柔らかいし、敏感な部分ばかり集中的に責めてくるう）

指先が鈴口を往復するたびに、ヌルリとした感触が走り抜ける。

すでに大量のカウパー氏腺液が溢れでているのだろう。

倅太はあまりのむず痒さから、口元をピクピクと引き攣らせた。

「そ、そう。見学者が三人だけなんて、参ったね」

「ホント。みんな期待してたから、がっかり感も大きかったみたい」とにもかくにも、真奈には絶対知られるわけにはいかない。

会話の流れでうまくごまかしたものの、一難去ってまた一難。

今度は亀頭の先端に、ひと際生温かい感触が駆け抜けた。

生温かいヌメヌメの舌がうねり、亀頭全体を這いまわる。

(ああああつ、な、何てことを……)

美少女の舌は柔らかく、やたらしつとりと濡れそぼり、軟体動物のようにくねくねと動きまわるのだから、童貞少年にとってはまさに驚愕のフェラチオ体験だった。

「倅太君、どうしたの？ 変な声出して震えてるけど」

「い、いや……あまりにもショックでさ。悔しさを、身体で表現してみました」

必死にごまかすも、さすがに倅太の異変に気づいたようだ。

真奈が怪訝な顔つきで身を乗りだしてくる。

再び机の下に視線を向けると、玲香はペニスを口から抜きとり、口元に手の甲をあててクスリと笑っていた。

(ち、ちきしよう。こいつ……からかってるんだ)

早く話を終わらせ、真奈を図書室から遠ざけなければならぬ。

倅太は唾を飲みこみ、心配そうに問いかけた。

「れ、練習のほうはいいの？」

「あ、いけない。途中で抜けだしてきたから、もうそろそろ行かないと」

「今日は、ホントにごめん。練習に参加できなくて。みんなにもよく謝っておいて」

ホツとしながら告げたとたん、またもや下腹部に快感が巻き起こる。

それはこれまでとは違い、稲妻に貫かれたような肉悦だった。

玲香は肉胴を右手でシュツシュツとしごき、怒張を口の中にズズッと呑みこんでいったのである。

(ひっ……ひいいひいいひっ！)

ねっとりとした唾液が絡みつき、上下の唇がペニスの表面を軽やかにすべっていく。うねる舌先が裏茎から縫い目をなぞりあげ、熱い息吹が男根にまとわりつく。

亀頭が喉の奥でキュツと締められた瞬間、倅太は奥歯をガチガチと鳴らしていた。

(あ、あ、あ……な、何だよ、フェラチオって、こんなに気持ちがいいんだ。すごい、すごすぎるううっ！　お願い、真奈。早く出て行ってくれっ！)

心の中で必死に願ったものの、無情にも真奈はさらに言葉が続けた。

「そう言えば、ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

「な、何？」

「玲香さんて……倅太君と出身中学が同じなんだってね」

「え？」

倅太が目を開くと同時に、玲香の抽送がピタリと止まる。

「放課後、倅太君はすぐに図書室に行ったから知らないだろうけど、他のクラスや三年生まで玲香さんを見に来て……。その話は、となりのクラスの子から聞いたの」

見目麗しき美人転校生は、すでに全校生徒たちの注目を浴びていたようだ。

（そう言えば、となりのクラスと同じ出身中学の女がいたっけ）

いつかはバレると思っていたが、まさかこんなに早く知られるとは。どう釈明したらいいのか。

倅太が額から脂汗を滴らせた瞬間、玲香が再び顔を前後に打ち振ってくる。

ペニスに受ける快感は、身体が椅子から浮いてしまうかと思えるほどの凄まじさだった。

剥き下ろした包皮を指で倅太の腹側に押しこみ、薄皮状態と化した亀頭と胴体をプラムのような唇がこすりあげる。

口の中に溜めた大量の唾液にペニスを泳がせ、ときには粘液を舌で絡ませながら刺激を与えていく。

さすがに派手な吸茎音は立てなかったが、玲香は顔を左右に揺らし、黒髪を片手で掻きあげながら、リズムカルなピストンで童貞少年の性感をあおっていった。

（あ、あああ、お、おチンチンが蕩けちゃいそう）

目の前のボーイフレンドが、まさか絶頂への階段を駆けのぼっていようとは露知らず、真奈は悲しげな表情で問いかけてくる。

「どうして昨日は黙ってたの？」

「ご、ごめん、あの、ほら……彼女が美人だ大人っぽいって盛んに褒めてたろ？ よけいな心配をかけさせたくなくて……」

バレたら、真奈との交際は終わり。

こめかみにあてていた拳を開き、手のひらで目線を隠しながら耐えるも、巨大な愉悦はペニスから肛門にまで一直線に突っ走った。

何とか自制を試みるも、身体に力がまったく入らない。

荒ぶる欲望の塊は射出口をノックし、一刻も早い至高の射精を訴える。

しかも玲香は怒濤のおしやぶりにくわえ、右指でペニスをきりもみ状に絞りあげた。心臓が痛いほど暴れ、肌の表面が総毛立つ。

腰に火柱が走り、堪えようにも四肢がぶるぶると震えてしまう。

「う……ううっ」

「こ、倅太君……」

（や、やばいっ！）



一瞬、我に返ったものの、真奈は思いがけない言葉を放った。

「……泣いてるの？」

「いや……その、真奈に嫌な思いさせちゃって……申し訳なくて」

素直な性格の少女は、ボーイフレンドの言い訳に疑う素振りすら見せない。

それどころかにつこりと笑い、慌ててフォローに走った。

「ううん、いいの。変なこと聞いちゃってごめん。じゃ私、練習に戻るね。今日は友達ちと買い物して帰るから、また明日」

真奈は踵を返し、軽やかな足取りで出口に向かう。

(……た、助かった)

安堵の胸を撫で下ろすも、ホッとしている余裕はない。

すでに性感はレッドゾーンへと飛びこみ、いつ射精してもおかしくないのだ。

目をカッと見開いた侍太は、凄まじい勢いで椅子ごと後ずさった。

玲香の口から、ギンギンに反り勃ったペニスガチュポンと抜ける。

唇と剛直とのあいだに、やや白濁化した唾液が糸を引き、床に向かってツツツと滴り落ちた。

なんと淫猥な光景なのだろう。

玲香の唇は妖しく濡れ、ペニスは水飴でも塗りたくったかのように照り輝いている。
「ふふっ、うまくごまかしたわね」

「はあはあ……ど、どういうつもりだよ？」

肩で喘ぎながら問いつめると、玲香は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「だって、しゃぶってほしかったんでしょ？」

「は？」

「この二年半、私にフェラされる妄想してたでしょ。お顔にたっぷり出すことも考えてたんじゃない？」

「う、ううっ」

確かに真奈というガールフレンドができて、玲香との淫らな行為は何度か思い描いていた。

当たっているだけに、何も言い返せない。

「と、とにかくチンポから手を離せっ！」

ペニスの根元には、いまだにしなやかな指が巻きついてる。

倅太が手を外そうとすると、美しき少女は当然のように言い放った。

「やめちゃってもいいの？ もう出そうなんでしょ？」

「な、何を……」

「だって侍太のおチンチン、もうビクビクしてるよ。意地を張ってないで、お姉さんに任せなさい」

「お姉さんて、俺とお前は同い年……は、おとおおおっ」

玲香の指が、凄まじいスピードでスライドを始める。

手首のスナップをきかせ、まるでペニスを蹴り倒すような激しさだ。

真奈がいなくなつた図書室で、クチュグチューツと、淫らな抽送音が鳴り響いた。

「や、やめ……ろ」

「やめなーい。だって侍太を射精させたいんだもん」

「な、何を今さら、勝手に人をフツておいて。俺がどれだけ傷ついたと思つて……あ、ひいひいひいひいっ」

非難の言葉を浴びせたとたん、逆手で男根が根元からギューツと絞りあげられる。

侍太の口から尾を引くような悲鳴が放たれ、鈴口からは先走りの液が八方に飛び散つた。

「ほら、もうこんなにエッチなお汁が出てるじゃない。我慢できないんでしょ？ 一滴残らず搾りとつてあげるから、全部出しちゃいなさい」

なんていやらしい言葉を口にするのだろう。

玲香が再びリズムカルに肉棒をしごきたててくると、倅太の瞳は虚ろと化し、口唇の端から涎が滴った。

「あう、あう」

抗おうにも、催眠術にでもかかったように身体が動かず、もはやまともな言葉すら発せられない。

今の倅太は、快楽の大海原にどっぷりと浸かっていた。

脳漿が煮え滾り、心臓の鼓動が早鐘を打つ。

視線が宙の一点を見据え、自然と大腿が開いてしまう。

「ふふっ、このあと私の家に来るでしょ？」

「だ、誰が……行くもの……か」

「来ないと、おチンチンしごくのやめちやうよ」

「ああ、や、やめないで」

もはやまともな思考が働かず、自分でも何を言っているのか理解できない。

「じゃ、来るのねっ？」

「行く、行くから！ は、ふうふうふうっ」

「ふふっ、先っぽがパンパン。ほら、イッチャいなさいっ！」

玲香はペニスを握りなおし、凄まじい速度でスライドさせた。

細長い指先を、根元からパンと張りだした雁首にぶつけてくるような激しさだ。

肉胴の表面をコーティングするヌルヌルの唾液が、心地いい感触を走らせ、射精感をグングンと上昇させていく。

「あ、そ、そんなことしたら!!」

「そんなことしたら何!!」

「あ、ぐうううっ」

玲香はほくそ笑みながら、空いている左手で、レンズを磨くように亀頭の先端を撫でまわした。

敏感な尿道口を刺激され、堪えきれない淫情が込みあげてくる。

柔らかい手のひらが、雁首を強烈にこすりあげた瞬間、倅太は腰を派手にくねらせた。

このまま射精すれば、玲香の顔にぶちまけてしまう。

それがわかっていても、牡の本能にブレーキをかけることはできなかった。

「あ、あ、イッチャう……イッチャう」

「いいよ、たっぷり出してっ！」

玲香は最後に念を押し、宝冠部を唇のあわいにすべりこませた。

「あ、あっ、お口、お口、お口にいいいいいいっ!!」

肉筒がドクンと脈動し、牡の欲望が輸精管をひた走る。

目を剥いた倅太は、大量の樹液を玲香の口の中にほとばしらせていた。

「んっ……んうう」

美少女の眉間に縦皺が寄り、やがて白い喉がゆつくりと波打つ。

倅太はその光景を、惚けた表情で見下ろしていた。

(ま、まさか……精液を飲んじゃうなんて)

玲香は言葉どおり、根元から指でしごきあげ、尿管内の残滓を搾りとる。そしてペ

ニスをお口から抜きとると、こぼれるような笑みを見せた。

荒い息が止まらない。

頭の芯が、じんじんと痺れている。

倅太はそのまま瞳を閉じ、気だるい表情で椅子の背もたれに身体を預けた。

課題を提出したあと、倅太は駅前で待ち合わせていた玲香とともに下校した。

部活帰りの真奈と鉢合わせするのではないかと、どれだけ冷やひやしたとか。

幸いにも王名の生徒はみんな帰宅の途へついたので、美人転校生といっしょに歩いている姿を誰にも見られることはなかった。

それでも真奈に対する後ろめたさは拭えず、倅太は終始無言のままだった。

(信じられないよ。まさか玲香にフェラチオされて、口の中に出しちゃうなんて。これって、完全な三角関係だよな。ああ、いったいどうなっちゃうんだよ)

これからの学園生活を想像しただけで身震いしてしまう。

玲香の真意がわからないだけに、よけい末恐ろしかった。

「今日はお父さんが出張でいないから、ゆっくりできるよ。私の部屋、確か一回来るよね？」

忘れるはずがない。

彼女の部屋は、ファーストキスを経験した記念すべき場所なのだから。

(あのときは、そのまま一気にエッチまでイけるって思ったんだっけ)

玲香は門扉から倅太を招き入れ、スカートのポケットから取り出した鍵で玄関の扉

を開ける。

ふと、真奈の顔が脳裏に浮かんだ。

やはり、このまま帰ったほうがいいのではないか。

罪悪感を覚えながらも、心のどこかで期待している自分がいる。

それは間違いなく、図書室で受けた淫らな口戯が大きく影響していた。

細胞の一つ一つが快楽に染められてしまったような、まるで天国に舞い昇るような感覚は初めてのことだった。

真奈相手の初体験は、まだ時間がかかるかもしれない。

性欲溢れる年頃の少年にとつて、大人っぽい玲香はやはり性的魅力に満ちていた。

(いやいや、ただ話をするだけだ。一応、家に行くつて約束をしちゃったんだし。それに……玲香が一方的に別れを告げてきた理由だけは、どうしても知りたい)

一度射精したことで、多少は気分が落ち着いている。

それでも図書室の出来事が脳裏をよぎると、股間の逸物はズキンとひりついた。

(今度は堪えろよっ！)

玲香とともに二階への階段を昇りながら、自分自身を戒める。

「さあ、入って」

室内に導かれた倅太は、部屋の中を見まわした。

机やベッド、チェストの位置は、中学の頃と変わらない。

ベージユのカーテン柄までまったく同じで、まるで二年半前にタイムスリップしたかのようなだった。

「適当にそこらへんに座って」

「あ、う、うん」

大人びた玲香でも、部屋の中は少女特有の甘酸っぱい匂いが充満している。

胸をキュンと締めつけられた倅太は、いそいそと室内の中央に歩み、ベッド脇へと腰を下ろした。

玲香は脱いだ制服の上着を椅子の背もたれにかけ、帰宅途中に購入した飲料水をガラステーブルの上に置く。そして自分は、そのまま椅子に腰かけた。

キスはおろか、フェラチオまで体験した仲なのに、どうにも重苦しい雰囲気漂う。やはり倅太にとって、二年半という歳月はあまりにも長かった。

「倅太のって、すごく濃いよね」

「え？」

「喉に絡んで、飲みこむの大変だったんだから。溜まっていたの？」

そう言いながら、玲香はすらりとした足を組む。

スカートがやや捲れあがり、すべすべした太腿が露わになると、倅太は慌てて視線を逸らした。

「そ、そんな……溜まってなんかいないよ」

「それなのに、あんなにたくさん出したの？ 倅太って、中学の頃からエッチだったもんね」

「エ、エッチなことなんて、してないじゃないか」

「してたわよ。女の子の胸を触ったり、スカートを捲ってたりしてたじゃない」

「あれは……女の子がキャーキャー喜ぶから、仕方なくやってたんだ。もうそういう子供じみたことは卒業したよ」

「しょってるわね。私にはしてこなかったけど」

本音を言えば、バストタッチもスカート捲りもしたかった。

だが当時の玲香はそんな行為を許さない雰囲気を漂わせていたし、ましてわずか二ヶ月の実際では親密な関係になれるはずもなかったのである。

「私も、あの頃は子供だったなあ」

「え？」

クールで大人びた玲香にしては意外な言葉だ。

倅太はここでようやく上着を脱ぎながら、面食らった表情で美少女を仰ぎ見た。

「ほら、話したでしょ？ 母親が浮気して両親が離婚したこと」

「……うん」

「小学五年生のときに親戚の叔母さんから聞いて、かなりショックを受けたわ。私には母親の血が流れているわけだし、ふつうの家庭に生まれた女の子じゃないって、ちよつと斜にかまえちやつて。要するにツっぱってたんだよね」

暗い過去を語りながらも、玲香の顔はやけに晴れやかに見える。

すでに母親のことは、自分の中で消化しているのかもしれない。

（あのととき、玲香が心の内を見せてくれていたら……いや、俺もガキだったし、とても受けとめられなかっただろうな）

最初は二人だけの空間に気まずさばかりが先行していたが、玲香の人間らしい一面を見たことで、ようやく緊張がほぐれていく。

その後は中学時代の教師や友人の話、思い出話に花が咲き、二人の口からは自然と笑いがこぼれていった。

「でも……ホントに別れを告げられたときは呆然としたんだぜ。なんせアメリカに行

くことさえ黙ってたんだから」

「ごめん」

「文通もメールも拒否されてさ。どうして、そこまでしなきゃならなかったんだよ」
「だから謝ってるでしょ。その代わり、こうやってまた会いに来てあげたんだからいいじゃない」

真剣な眼差しで問いかけるも、玲香は決して真相を語ろうとはしない。

仕方なく、倅太は彼女の返答に合わせた。

「そう来るかっ！ 言っておくけど、俺には……」

「わかってる。二人の仲に割って入ろうなんて思っていないわ」

「だったら何であんなことを」

再び図書室の出来事が甦り、身体がポツと熱くなる。さらに玲香の美しい容貌、赤い唇が視界に入り、自然とペニスに血液が集中していった。

「ちよつと、からかってやろうと思っただけよ」

「やっぱね！」

欲情を悟られないよう、両手で股間を隠しながら睨みつけると、玲香は意味深な笑みを浮かべる。そしてズバリと核心を突いてきた。

「あの子とは、まだなんだ？」

「そ、それは……」

「キスはしたの？」

「お、お前に関係ないだろっ」

「何なら、私がまたしてあげようか？」

「え？」

玲香が回転椅子に座ったまま、スーッと近づいてくる。そして右足を倅太の股間に伸ばしてきた。

「な、何をっ……!!」

「ふふっ、あからさまに手で隠しちゃって。ちゃんとわかってるんだから」

「よ、よせっ！」

手を払いのけられ、足の爪先が中心の膨らみをツンツンとつついてくる。

先ほど大量射精したばかりにもかかわらず、ズボンの中のペニスはむっくりと膨張していった。

「ほら、おチンチン、もうコチコチ。一滴残らず搾りとったはずなのに、キンタマの中にはまだエッチなミルクが残ってたんだ」

「あ……あああああああつ」

透明感のある美少女の口から、淫語がポンポンと飛びだし、そのギャップが倅太を一気に墮淫の世界へと引きずりこんだ。

「あ、あうううつ」

紺色のハイソックス越しの爪先が、三角の頂をグリグリとこねくり回す。

「気持ちいい？」

玲香は冷ややかな視線を注ぎながら、さらに左足で陰囊のあたりを撫でまわした。

「き、気持ちよくなんか……ないぞ」

「強がり言っちゃつて。ズボンがはち切れそうじゃない」

「ぐ、ぐおおおおつ」

玲香の足は、手に負けず劣らずの器用な動きを見せた。

ややがに股ぎみに足を開き、両足の裏側でペニスの側面をこすりあげる。

ズボン越しとはいえ、ふつくらとした爪先がピンポイントに雁首を刺激し、倅太はじかに足コキをしてほしいという本能に苛まれた。

（ああ、まさか足でされて、こんなに感じるなんて）

フェラチオといい足コキといい、玲香はいつたいたいほど豊富な性体験を積んでい

るのだろう。

下腹部を覆い尽くしていく快美に翻弄されながらも、倅太の瞳はスカート奥の覗き見える白いパンティをしつかりと見据えていた。

乙女の三角地帯が何とも悩ましく、ふるふると揺れるまろやかそうな内腿が牡の欲望に火をつけていく。

「ひよっとして、もう出ちやう？」

「あ、足なんかで……イクものか。やめろっ」

図書室で一度射精していなければ、間違いなくパンツの中に放出していたに違いない。精いっぱい強がりながら下腹に力を込めると、玲香は足の動きを止め、椅子からすつくと立ちあがった。

すぐさま絨毯の上に跪き、顔をグイッと寄せてくる。

「な、何だよ」

「ホントにやめたほうがいい？」

美少女が首をやや傾け、切なげに問いかけてくる。

「あ……あ、あ」

流麗な弧を描く細い眉、カールした長い睫毛、なめらかな艶を発する唇。

間近で目にする、なんと美麗な顔立ちをしているのだろう。

じっと見つめられるだけで、黒曜石のような瞳に吸いこまれてしまいそうだ。

（れ、玲香って、やっぱり美人だよな。いや、美人すぎるよ。でも……何でこんなに悲しげな表情をするんだよっ）

玲香は中学時代の自分は子供だった、斜にかまえていたと言っていた。

友だちも多くはなかったし、久しぶりの帰国、見知らぬ生徒ばかりがいる学校に編入したということで、心細い気持ちがあるのかもしれない。

「そ、それは、やめてほしいと言えば嘘になるけど……」

「ほら、やっぱりしてほしいんじゃない。正直に言えればいいのに」

同情心からつい優柔不断な発言をすると、玲香は一転して勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

（だ、だまされた。こいつ、絶対に悪魔だっ！）

悔しさに奥歯をギリリと噛みしめた直後、美少女は倅太の腰を跨いでくる。そして電光石火の早業で、学生ズボンのベルトを外し、チャックを引き下ろしてきた。

「お、おい……何をする気だよ!？」

「だって我慢できないんでしょ？ ちゃんと知ってるんだから。足コキしていたとき、

私のスカートの奥を覗いていたこと。ほら、パンツ脱がせるんだから腰を浮かせて」「み、み、見てないって。それにさっき言ったろう、俺には真奈という彼女がいるって……あうっ！」

玲香の右手の指先が、トランクス越しに股間の膨らみをグリグリとこね回してくる。侍太が腰をくねらせると、美少女はあっという間にズボンをパンツごと引き下ろした。

すっかり欲情した牡の証が、扇状に翻りながら下腹をぺチンと叩く。

「や、やめろっ」

泡を食った侍太が手で男根を隠そうとした瞬間、玲香は目を細め、囁くように言い放った。

「今日の私、Tバック穿いてるんだ」

「えっ!!」

「ほら」

「きやーっ!」

玲香が左手でスカートをたくしあげ、下腹部を露わにさせる。

あまりの突然の行為に驚いた侍太は、女の子のような悲鳴をあげたものの、視線は

乙女の股間に釘づけになっていた。

「ふふ、見たかったんでしょ？ いいよ、たっぷり見て」

白い小さな三角布地は、美少女の縦筋だけを隠しているだけにすぎない。

紐のように細い両サイドは腰にぴっちり食いこみ、こんもりとした恥丘をこれでもかと際立たせていた。

（な、な、なんてエッチな下着を穿いてるんだ）

牡の本能をあおられ、ペニスがびくびくとしなる。

玲香はほくそ笑みながら、ふっくらとした乙女の丘を裏茎にそっと押しあてた。

「あ、くううううーっ」

ふにふにとした、マシユマロのような感触が走り抜ける。

パンティ越しとはいえ、やたら柔らかくて温かい膨らみが、今自分の恥部に押しつけられているのだ。

なんといやらしくて、刺激的な状況なのだろう。

鈴割れから先走りの液がじわりと滲みだし、龟头を瞬く間に濡れそぼらせていった。「ふふっ、やだ。またおチンチンがビクビクしてる。出したくなっちゃった？」

玲香は言葉で責めたて、クイッククイックと腰を軽く前後に振る。

「あ、はあああああつ……そ、そんな!？」

「何がそんなよ。こんなにいっぱい我慢汁溢れさせちゃって」

秘園を覆うなめらかな布地が裏茎の表面を往復し、そのたびに尿道口からはカウパ
ー氏腺液が源泉のように噴きだした。

昂奮がとどまることを知らずに上昇し、自制心などまったく働かない。

頭の片隅でからかわれている、もてあそばれているとはわかっていても、倅太の口
から拒絶の言葉はいつさい出てこなかった。

（ち、ちくしょう！ どうして為すがままになってるんだよ、何でこんなに昂奮する
んだっ!!）

自分の意思とは無関係に腰がくねり、半開きの口から熱い溜め息がこぼれる。

險の縁に涙を溜めた瞬間、玲香はスカートをたくしあげたまま身体を反転させた。

（あ、あああああつ!）

シミの一点もない、白桃のようなヒップがさらけ出される。

プリンとしたすべすべの尻朶、臀裂に食いこんだ細紐、ヒップの下方からわずかに
覗き見える乙女の恥丘。

それらが三位一体となり、牡の本能をこれでもかと刺激してくる。

「もっとエッチなこととしてあげる」

玲香は肩越しに振り返りながら言い放ち、躍動する若茎に股間の膨らみを再び押しつけた。

「く、くおとおおおおつ」

先ほどとは段違いのスライドが繰り返され、もっちりとした美少女の恥部がグイグイと裏茎をこすりあげていく。

（あ、あ、あ……ぬ、濡れてるっ！）

童貞少年を責めたてながら、玲香自身も昂奮しているようだ。

三角布地に、淫らなシミがどんどん広がっていく。

動きがあまりにも激しすぎるせいか、布地が淫裂に振りこみ、地肌の色まで透けているようだった。

（いやらしい、いやらしすぎるよっ！）

生温かいヌチャとした愛液の感触もさることながら、ペニスを甦る淫靡な光景が脳漿を沸騰させる。

倅太は息を荒らげ、絶頂への螺旋階段を凄まじい速さで駆けのぼっていった。

「あああ、私も気持ちよくなってきちゃった」

玲香の腰は、もうレゲエダンサーのような動きを見せていた。

くねくねと蠢く腰つきはもちろん、左右に揺れる瑞々しいヒップの躍動感が牡の本能に火をつける。

こんもりとした恥丘の膨らみが裏茎をこすりあげ、スライドのたびに内腿がペニスの側面をやんわりと撫であげていく。

(内股の感触も気持ち……いい。ふっくらしていてすべすべしていて、どうして女の子の身体ってこんなに柔らかいんだっ)

男根の奥がじんじんと疼きはじめた瞬間、玲香はヒップを小刻みに前後動させた。

「は、ひっ！」

摩擦感がより強くなり、陰囊の中のスペルマが猛り狂う。

よくぞこれだけ腰が動くものだと、頭の片隅で思いながらも、プディングのように揺れる尻肉が童貞少年の目を強烈に射貫いた。

「あ、あ……ああ、出ちやう出ちやう、出ちやうううっ！」

「あんっ！ 私もイキそうっ」

全体重をかけられたペニスガひしゃげ、小高い恥肉の丘陵が裏茎をしごきたてる。青白い閃光が脛の裏で瞬いた瞬間、倅太は空気を切り裂くような雄叫びを放った。

「イクっ！ イッチャう、イクうううううっ!!」

亀頭の先端から射出した樹液が首元まで跳ねあがり、ワイシャツに白濁のシミを広げていく。

倅太の射精は一度だけにとどまらず、ペニスが脈動するたびに大量の精液を噴き出していった。

「いやんっ、まだこんなに出るのっ!!」

玲香は後ろを振り返りながら驚嘆の声をあげ、自身も絶頂に向けて、腰をこれでもかと振りたてる。

愛液にまみれた三角布地は、もはや下着の役目を果たしていない。

桜色に染まった大陰唇はもちろん、可憐な花びらまではみ出てきそうだ。

「はああああん、私もイッチャうっ！」

ガクンガクンとヒップが前後にわななき、美少女の瞳が陶酔の色へと移ろっていく。

玲香がエクスタシーに達する姿を見届けることもなく、倅太は惚けた表情で、射精後の快楽の余韻に浸っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>